

地域の資源を〈知恵で〉観光資産にする

縁あってニューヨークとボストンを小旅行する。国連本部のピース・ベル ガーデンとボストン美術館の天心園の管理ボランティアが主目的である。今号の特集は「地域活性化の推進」で観光がキーワード、人口減少で少子高齢化の縮減型社会を前提に、その対応ともなる地域再生の話題が絶えない。シニア世代のボランティアを兼ねた小旅行も今後大いに期待できる観光形態だと思う。観光公害とならない適正規模の観光は、交流人口で地域を元気にする打ち出しの小槌に見える。ずっと以前、昭和40年代中頃は観光開発計画が全国各地で盛んだった。人口増で経済成長が著しい頃である。私も若い頃、新潟県守門村や秋田県大森町など幾つかのプロジェクトに関係した。半世紀も前のことで、当時は「観光診断」の言葉がよく使われ、地域を調査分析し計画の対象を観光資源と観光産業施設に定めて計画に落とし込んだ。前者の観光資源は自然資源と文化資源、後者の観光産業施設には教育・娯楽施設と旅行施設が挙がっていた。地域に賦存する資源に光を当て、観光産業施設との結合で資産化を図るものであった。資源の経済的価値を高次に上げる資産化事業であったと今にして振り返る。この「資源の資産化」の営み自体は、以後時代が推移しても大きく変わることなく現在に至っている。しかし資源の捉え方なり資産化の観点は相当変わったように思う。昭和47年（1972年）当時は、観光開発に限らず「計画思考」が日本列島の隅々に影響を及ぼし始めていた。計画の知識と手法を用いて将来を考える創造的政策もこの頃から、国土を舞台に始まった。

成長社会の進展と共に地域の開発が進み、観光

資源については保護・保存・保全の手が打たれ、観光産業施設は多様に整備された。政策から計画、計画から事業へと展開した成果のトピックを拾うのは簡単である。観光地の整備は拠点からルートへ、ルートから回廊へ、そして地域へと拡張した。これに応じて観光産業の振興が観光地経営へ、最近では観光を包摂した持続可能なエリアマネジメントに移って来ている。交流人口の増加となる旅の目的地が点から線、線から面に広がるに応じて、地域活性化は有効に作用すると考えたい。そのように認識した時、今は、観光と並行して進められた国土インフラに注目する適期のように思える。道路、河川、港湾、空港、下水道、公園等の整備5箇年計画の成果に目を向けたい。最も歴史の長い道路整備から70年、比較的短い下水道や都市公園整備からでも半世紀が過ぎた。これらには維持管理と更新を含むストックマネジメントの課題が多く、長寿命化の言葉も頻繁に耳にする。もちろん課題解決は大事であるが、私がより重要と思うのは、これらのインフラストックを地域資源として維持するに止まらず、ライフサイクルコストを考慮したアセットマネジメントに取り組み、優れて資源の多目的化となる再デザインに導くことだと考える。そのためには政策間連携が鍵で、そこで私は再整備や再開発ではなく再デザインを使う。デザインが持つ「願いの達成」に共感して創造的取組を強調したいがためである。凌ぎの対策を超えた機能と価値の再生となる変革を望みたい。現世代は、初めて直面したCOVID-19の感染症で様々な試行錯誤を余儀なくさせられた。オンライン会議などを新しい社会行動の進化と捉え、正



東京農業大学名誉教授
熊本県立大学名誉フェロー
農学博士

みのも としたろう
蓑茂 壽太郎

のレガシーにしたい。関東大震災から100年目だが、その復興計画で見られた建築・同潤会アパート、土木・隅田川近代五橋、造園・防災公園などは、各界の新時代幕開けとなる創造的復興事業であった。そして今、私たちが直面している地球温暖化による大災害は食糧問題にまで迫っている。日本の国土はもとより、世界各国各地域に及ぶ影響に正対する時だと思う。災禍を転機とした挑戦は有意義であったからで、俯瞰して認識すべきは成長社会から成熟社会への移行期にパンデミックに遭遇したことである。成熟社会の真の姿は、働き方や日常生活に見られる。国家のパラダイムが変わる最中、折しもワーク&ライフバランスが叫ばれて人材確保が一番の時期の混乱であった。そうした思いを持つ中で携わった私のプロジェクトの一部について、誌面の許す範囲で触れておきたい。

阪神淡路大震災（平成7年（1995年））以降、各地で頻発する地震災害に加えて気候変動が引き起こす風水害が未曾有の事態を招いている。レジリエンスが喫緊の課題となっていた時期に熊本地震（平成28年（2016年））を経験した。発災後の復旧は計画思考が再び重視される時代と重なった。これは私の所見である。災害復旧での改良復旧も試みられ、国民の関心が復旧に続く復興まちづくりに及んでいた。希望と期待が持てる復旧で、文化財・公園・観光・まちづくりと複数の政策を重ねた政策間連携で熊本城の復旧復興の議論は始まった。ここで発想したのが展示型復旧である。端的には「今を見て、今を見せる」である。創造

の原点として現実を直視する原則に立ち、展示型復旧のインスピレーションはごく自然に浮かんだ。地方圏における中心市街地の再生とその創造的取組が問われていた時期で、幸運にも、筆者は「熊本城と庭続き まちの大広間」をデザインコンセプトとする桜町・花畑のまちづくりに関与していた¹⁾。熊本城の復旧工事を立入禁止として長期間休眠状況にする勇気が私にはなかった。死んだ工事期間ではなく、生きた工事期間としたかった。来訪者を受け入れ、観光の舞台とすることでまちの活性化の資源とする構想とした。

同じく熊本県天草市の崎津では世界遺産登録に関連して、漁村集落の景観整備を進めた。構成遺産に適う場のオーセンティシティ・真正性を大事に地域の持続可能性に係る人流経済を考え、これに資する関連施設の整備を調べ「グッドデザイン賞ベスト100」の結果も得た。知恵を絞り、知恵の輪ができることを表題の〈知恵で〉に込めている。そうした知恵が出ていると思う事例を私はいま訪問中で、香川県直島・本村地区での「家プロジェクト」では、アートの力を得た集落景観の生態保存の一つの方法を学ぶことができ、栃木県那須塩原市黒磯の「黒磯のまちを面白くするプロジェクト」からは、これからの成熟社会でのツーリズムのヒントを得ることができた。まだまだ全国各地を訪ねたい。

<参考文献>

- 1) 蓑茂壽太郎：トポフィリアとまちの再デザイン、新都市76巻8号pp.3~5、2022

【著者紹介】 蓑茂 壽太郎（みのも としたろう）

1950年熊本県生まれ。東京農業大学造園学科卒業、同大学で農学博士の学位取得後、助教授、教授、副学長歴任。その後、公立大学法人熊本県立大学初代理事長。一般財団法人公園財団理事長を経て、現在、熊本市都市政策研究所所長。